

8. 教員養成シンポジウム

(1) 学生と語る教師の魅力

7月24日に、茨城県教育委員会教育長の柴原宏一氏を招聘して「学生と語る教師の魅力」と題して全学教職センターシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、三大学連携協定に基づいて、茨城キリスト教大学、常磐大学にも案内した。参加者は約120名であった。柴原氏の高校教員時代の教え子との関わりの講演は、感動的であり、多くの学生たちの共感を呼んだ。講話後のフリートークでは、学生たちと近い距離で対話的に語り合う形で進められ、学生にとって極めて有益なものとなった。



実施後のアンケートによれば、94名の学生が回答を寄せてくれた。柴原教育長の講演については、100%よかったと回答し、フリートークについても81%の学生が満足したとの回答をしていた。講演会では、「教育長自身の失敗や経験、教え子とのお話は感動的であり改めて教師の魅力を感じた時間でもあった。」「教師は生徒の可能性を伸ばすのが仕事である



という言葉が印象的であった。」フリートークでは、「学生の質問に丁寧に答えてくださってありがたかった。」「裏付けとなるデータを提示していただきわかりやすかった。」「もう少し時間がほしかった。」といった感想が寄せられていた。「このような講演会やシンポジウムをもっと増やしてほしい。」といった意見もあり、参加してくれた学生たちにとって充実した時間となり、教育的効果は大であった。

(アンケートの自由記述から)

- ・とても具体的でリアルな話をしてくれたので、私が実際教員になってからの創造もでき、生徒をきちんと見てあげられる教師になりたいと思った。
- ・自分の体験に基づいて話しているだけでなく、1つ1つの日常が大切だということを熱心に語っていることがとても印象的でした。生徒への信頼というものを感じないといけなかった。
- ・教員が子どもを育てるという考え方しかなかったが、生徒に自分は育てられているという話を聞いて、心が動かされるような気持ちになり、新しい考え方を知ることができた。
- ・私は絶対教員になりたいので、教員(教育)のことばかりに興味をもつようにしていたけれど、広い世界、いろいろな世界を見ようと思いました。
- ・今の教育現場の実情や必要な視点などたくさん知れて良かったと感じました。
- ・学生の本音に親身に答えて下さって、早ければ来年度に教員になる予定の自分にとって、自分なりに頑張りたいと思えた。
- ・教師の大変さ・苦勞というものはもちろんありますが、それ以上にやりがいがあること、モチベーションとなるような感動があることが分かりました。

(2) 教職の魅力について現職の先生と語り合う

令和2年2月15日(土)に、「教職の魅力について現職の先生と語り合う」というテーマで教員養成シンポジウムを開催した。全国的に多くに自治体において教員採用数が多い状況の中で、教職を志望する学生は減少してきていると言われている。そこで、教職を目指している学生たちが教員の仕事について見つめ、喜び、難しさ、やりがいといった教職がもつ魅力を改めて感じることができるようになりたいと願い、今回のシンポジウムを企画した。

主な内容は次のとおりである。

- ①茨城県内で教職に就いている本学の卒業生の中で採用2～4年目の若手教員を招いてお一人ずつお話を伺う。
- ②全学教職センター教員を交えて座談会のような形で、参加した学生からの疑問や質問にざっくばらんに答えながら、教職の魅力についての考えを深めていく。

お招きした教員(卒業生)は以下の方々である。

- ・海老根麻斗さん
(大洗町立南小学校教諭・理科選修卒・4年目)
- ・室井健太さん
(水戸市立赤塚中学校教諭・数学選修卒・3年目)
- ・赤田部友貴さん
(茨城県立日立北高等学校教諭・国語選修卒・2年目)
- ・石田朱里さん
(大子町立上小川小学校養護教諭・養護教諭養成課程卒・3年目)



小学校、中学校、高等学校のそれぞれの校種で勤務されている先生と小学校で養護教諭として勤務されている4名の方に来ていただいた。まず、お一人ずつ、現在の仕事の内容、教員1年目から今までを振り返って苦労したこと・よかったこと・嬉しかったこと、今後の目標や課題などについて話をしていただいた。職種、校種、専門教科が違うことによって、経験されていることや勤務の環境もそれぞれ違って、どの先生の話もたいへん興味深いものであった。実際に仕事をしている様子や子どもたちとの活動の様子などを画像で紹介してくださり、勤務校での日常の様子が参加した学生たちにとってもイメージしやすい話であった。



1年目から今までの間にはたくさんの苦労があったようだが、周りの支えもあってそれらを乗り越えてきた様子なども語ってくださった。4名の先生方からは、教師の仕事には日々の忙しさや苦労を超えたやりがいや喜びがあることがひしひしと伝わってきた。子どもたちに注ぐ愛情の深さや、教育にかける思いの強さのようなものが会場全体に溢れていた。

シンポジウムの後半は、4名の先生にセンター専任教員（昌子、菊地）も加わって座談会のような形で話を深めていった。あまり堅苦しい話題にならないように、参加した学生たちからの質問に4名の先生方が答えていく流れで進められた。

主な話題としては、学生のうちに何をしておいたらよいか、同僚の先生との関係づくり、子どもとの距離感のつくり方、特別な支援が必要な子どもへの対応、学習指導で子どものやる気をどうやってつくるかなど、多岐にわたっていた。最後の頃には、「教員はブラックだと言われているが、やめたくなくなったことはありますか。そこでやめない信念みたいなものは何かありますか。」というような質問があった。先生方の考えに共通していたことは、子どもたちとかかわる時間や子どもたちのために頑張る時間は自分の元気や成長につながり、それこそが教職のやりがいだということである。先生方が本音で語ってくださり、聞いていた学生たちも納得した様子であった。



参加した学生は約100名であったが、「今回のシンポジウムに満足できたか」というアンケートに対して9割近くの学生が「とてもよかった」と回答していた。その主な理由として以下のようなものがあつた。

- ・実際の教育現場で働いている先生にしかわからない話が聞けて非常に有意義でした。
- ・座談会で生の声が聞けてよかった。
- ・若い先生たちだったので、私たちに近い感覚で話していただけたのでよかった。
- ・教員になったときに役立つような内容でよかった。様々な視点から教職をみることができ、価値観や視野が広がった。
- ・明るく、生き生きとした先生方を見て、自分ももっと頑張りたいと思った。
- ・先輩方の実際の経験を踏まえた話を聞き、教師を目指す気持ちが高まりました。
- ・教員のやりがいについてたくさん話が聞けて、今後のモチベーションになった。
- ・リアルな教員生活のやりがいや苦勞を聞いてよかったし、より教員に向けてのやる気が湧いたのでよかった。
- ・何年か前に自分と同じ大学生だったとは思えないくらい4人の先生方がしっかりしていて、本当に尊敬しました。今は正直教師になろうか迷っていましたが、今回の話を聞いて教師になりたいという思いがいっぱいになりました。



今回の4名のような先輩教員が憧れや目標となって、教職を目指すモチベーションの高まりにつながることを期待している。